博　多　44

—博多遺跡群第78次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第393集

1 9 9 5

福岡市教育委員会

序

福岡市の都心部、JR博多駅から博多港にかけての一帯の地下には、古代以来大陸・朝鮮との貿易で栄えた都市「博多」の遺跡が眠っています。

今回報告する博多遺跡群第78次調査地点は、室町時代、遣明使節や中国・朝鮮からの使節が滞在したことで知られる妙楽寺の故地に近く、当時の博多の西端に位置しています。本調査で検出された中世前半期の掘遺構や、戦国時代の大規模な建物跡は、博多の周縁部の動向を物語る貴重な事例と言えます。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理・報告までさまざまなご協力をいただきました株式会社勤労者財形住宅センターおよびりんかい建設株式会社をはじめとする多くの方々に、心から謝意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　尾花　剛

例言・凡例

1．本書は社屋ビル建設に先立って福岡市教育委員会が調査を実施した、福岡市博多区古門戸町28・29番に関する発掘調査の成果を報告するものである。
2．本書の編集・執筆は、大庭康時が行なった。
3．本書に使用した遺構実測図は大庭および大庭智子、石橋亮、菊池智恵、草野里美、高木素子が、遺物実測図は、大庭、森本朝子、井上涼子、上塘貴代子、佐藤信が作成した。整図には、大庭、井上、佐藤、萩尾朱美、桝屋育子があたった。
4．遺構実測図中の方位は、すべて磁北である。
5．本書に使用した遺構・遺物写真は大庭が撮影し、萩尾朱美が焼付した。
6．本調査に関わる記録類・遺物の整理には、生垣綾子、古谷宏子、保利みや子、萩尾朱美、森寿恵、今井民代があたった。
7．本調査に関わるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵管理・公開される予定である。

目　次

第一章　はじめに　1
1．発掘調査にいたるまで　1
2．発掘調査の組織と構成　1
3．調査地点の立地　2
第二章　発掘調査の記録　3
1．調査の経過　3
2．調査地点の層序　5
3．発掘調査の方法　5
4．各遺構検出面の概要　6
1)．第一面　6
2)．第二面　8
3)．第三面　10
5．遺構と遺物　12
1)．建物跡　12
2)．石積遺構　15
3)．土坑　20
4)．井戸　26
5)．互溜り　30
6)．埋葬遺構　32
7)．その他の出土遺物　37
第三章　まとめ　40
付篇　博多遺構群78次調査出土の中世人骨　中橋孝博（九州大学比較社会文化研究科）　43

遺跡調査番号	9222		遺跡略号	HKT78	
調査地地番	博多区古門戸町29・28		分布地図番号	天神49	
開発面積	286.44m²	調査対象面積	227m²	調査実施面積	227m²
調査期間	1992年7月13日～10月2日				

第一章　はじめに

1．発掘調査にいたるまで

1992年3月19日、株式会社勤労者財形住宅センターより福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区古門戸町28－29番に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地は、中世に中国・朝鮮などとの貿易で栄えた都市「博多」の遺跡である、博多遺跡群の推定範囲に含まれていた。

実は、同地については1990年に埋蔵文化財事前調査願が出されたことがあった。その際、埋蔵文化財課では、上記の理由から試掘調査を実施、遺構の存在を確認している。

今回の申請に対しては、この1990年10月12日の試掘結果を受け、発掘調査が必要であるとの判断で当初から対応することとなり、設計・施工業者である、りんかい建設株式会社との協議にはいった。りんかい建設株式会社の当初の計画では、1992年5月着工、翌3月完成予定との事であったが、すでに平成4年度前半の埋蔵文化財課の調査工程はつまっており、調査に要する期間からみても、業者の希望を容れることは、到底不可能であった。業者との協議は再三にわたり、また埋蔵文化財課でも調査スケジュールの調整をはかった結果、6月になって最終的な合意に至り、同年7月より調査を実施することとなった。

7月9日、発掘調査を担当する埋蔵文化財課第2係大庭康時とりんかい建設株式会社とが、調査に向けて、現場で打ち合わせを行ない、現場仮囲い、山止め工事、表土掘削・残土搬出・動力(200V)設置などの条件整備を詰めた。そして、業者による表土掘削（現地表下1.5m）が終了する予定であった7月13日、発掘調査器材を搬入し、調査を開始した。ただし、実際には、7月13日には業者による残土搬出と仮囲いのフェンス設置が終らず、また雨天だったこともあり、中1日をおいて7月15日より現場作業に着手した。

2．発掘調査の組織と構成

調査委託　株式会社　勤労者財形住宅センター　代表取締役　吉本雄一
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　井口雄哉
調査総括　同　埋蔵文化財課課長　折尾　学
　　同　第2係長　塩屋勝利
調査庶務　同　第1係　吉田麻由美
調査担当　同　第2係　大庭康時
調査作業　菊地智恵　草野里美　高木素子（以上福岡大学）　石橋亮　岩隈史郎　大庭智子
　　近藤澄江　権藤利雄　篠崎伝三郎　芹野謙蔵　渋谷友代　津川真千代　寺園恵美子
　　村崎祐子　村田敬子　柳瀬亜紀　柳瀬伸　古住シヅエ　萬スミヨ

この他、発掘調査に関する条件整備、種々の便宜などについて、りんかい建設株式会社を始めとする多くの方々の御協力をいただいた。また、出土人骨の調査・取り上げ、整理については、中橋孝博氏（九州大学医学部解剖学第二講座、現在同大学院比較社会文化研究科）にお願いした。記して謝する次第である。

3．調査地点の立地

博多遺跡群をめぐる歴史的な環境については、本報告書では、紙数の関係から割愛せざるを得ない。これについては、博多遺跡群の他の報告書を参照していただきたい。

ここでは、第78次調査地点に関する点に限って、その地理的条件と歴史的経過について記す。

博多遺跡群は、御笠川と那珂川の河口部に挟まれた博多湾岸に位置する。基盤は、博多湾に沿って形成された3列の砂丘である。内陸側の2列を「博多浜」、海側の列を「息浜」と呼ぶ。これらの砂丘は、縄文海進後の海退によって、出現したもので、「博多浜」では早くも弥生時代中期から集落が営まれていた。そして、平安時代末期には、中国人商人である博多綱首が多数住み着き、中国・朝鮮との貿易で繁栄した。この当時、「息浜」は、まだ海から頭を出しかけた程度の砂丘で、「博多浜」の海に対する障壁の役割を果たしていたものと考えられる。

「息浜」の名の初見は、「蒙古襲来絵詞」である。さらに、元弘三年（1333）の元弘の変における鎮西探題館の合戦を記した「博多日記」には、肥後の菊池氏の宿所があったことが見え、「スサキ」という地名も書かれている。これまでの発掘調査での所見では、「息浜」が都市「博多」の範囲に取り込まれたのは、12世紀後半から13世紀前半のことと考えられており、「博多浜」に対する新興の町場の姿が浮かんでくる。

「息浜」は、南北朝時代頃から、港湾機能を持ち始めたようで、室町時代には、「博多浜」にとって変わって、博多繁栄の中心地になっていく。「息浜」の西端には、妙楽寺が建てられ遣明使や来日僧侶・使節の滞留するところとなり、対明・対朝鮮関係の核になっていた。

本調査地点は、「息浜」の西部「スサキ」（＝須崎）付近で、妙楽寺の故地（近世以降は「博多浜」にある）の南側に隣接している。

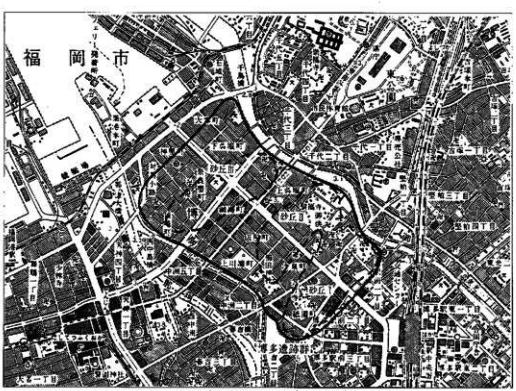


Fig. 1 博多遺跡群位置図(1/25,000)

第二章　発掘調査の記録

1．調査の経過

前述の如く、1992年7月13日調査器材を搬入し、同15日より発掘作業に着手した。それ以降、調査終了までの大まかな経過を、調査日誌から抜粋して記す。

7月15日　残土処理および重機の出入スペース確保のため、現場を南東と北西に二分することとした（A区・B区）。業者が表土掘削したその下面において、とりあえず遺構検出を試みた。A区中央付近で、道路面または家の土間と思われる硬化面を検出した。

7月18日　A区の硬化面周囲においては、特に遺構は検出できず、また部分的に攪乱をうけて荒れていることから、重機を入れて全体に掘り下げることにし、掘り下げ後の検出面を第1面、当面を第0面とした。なお、硬化面については、太平洋戦争からの復興以前の道路筋の配置の検討から、道路に面した建物の土間であると判断した。

7月20日　第0面からの掘り下げ。A区第1面、遺構検出。

7月22日　測量基準線を調査区の長軸に平行させて設定、全体を2m方眼に区切ることとする。

7月31日　A区第1面全景写真撮影。

8月4日　2級基準点よりレベル移動。

8月7日　トレンチを設定。第2面までの掘り下げの深さを検討する。

8月8日　台風10号襲来。トレンチが一部崩れた他は、特に被害はなし。

8月10日　バックホーによる掘り下げ。

8月11日　残土搬出。A区第2面遺構検出。遺構精査にとりかかる。

8月20日　A区第2面全景写真撮影。

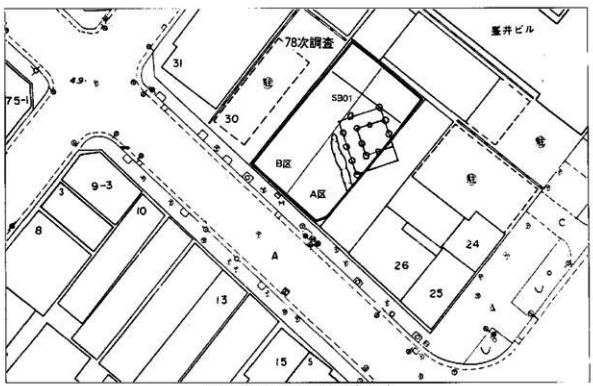
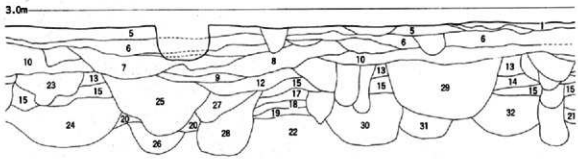


Fig. 2　第78次調査地点位置図(1/500)



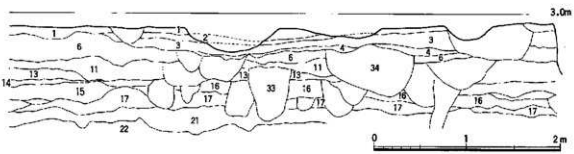
1．茶褐色土
2．灰色砂質土
3．褐色砂質土
4．灰白色砂
5．褐色土
6．暗褐色土
7．灰色をおびた褐色土、やや砂質
8．褐色土
9．暗灰色土
10．茶褐色土
11．暗茶褐色土
12．暗灰色土、炭粒多
13．暗褐色土
14．灰褐色土、暗褐色土の小ブロック多く混じる
15．褐色砂質土
16．茶褐色土
17．淡黄色砂

整地層

Fig. 3　調査区南東壁土層実測図

8月22日　A区掘り下げ（バックホー）。
8月24日　残土搬出。A区第3面遺構検出。遺構精査にとりかかる。
8月31日　A区第3面全景写真撮影。
9月2日　九州大学中橋孝博氏により、土葬墓の埋葬人骨とりあげ。
9月3日　バックホーで打って返し。B区の調査に着手する。
9月4日　B区第1面遺構検出。遺構精査にとりかかる。
9月8日　B区第1面全景写真撮影。
9月10日　B区掘り下げ（バックホー）。
9月11日　B区第2面遺構検出。遺構精査にとりかかる。
9月17日　B区第2面全景写真撮影。
9月19日　B区掘り下げ（バックホー）。B区第2面689号遺構より、パスパ文字印指輪出土。
9月21日　B区第3面遺構検出。遺構精査にとりかかる。
9月25日　B区第3面全景写真撮影。

Fig. 4　調査区南東壁土層（北西より）



18. 褐色砂
19. 黒色土
20. 18層と同質、同一層か
21. 暗褐色土、部分的に炭を多く含み黒色土となる。
22. 淡黄色砂、地山砂丘砂層
23. 茶褐色土
24. 黒褐色土、炭を多く含む
25. 暗灰色土
26. 濃暗褐色砂質土
27. 灰褐色土
28. 暗灰褐色土
29. 暗灰褐色土
30. 淡褐色砂質土
31. 明褐色砂質土、キメ細かい
32. 灰褐色砂質土
33. 濃褐色土
34. 濃暗褐色土

10月1日　九州大学中橋孝博氏により埋葬人骨取り上げ。
10月2日　器材搬出。発掘調査終了。

2．調査地点の層序

調査地点の基盤は、淡黄色の砂丘砂層である。調査区南東壁の観察では、基盤砂層の土にうすく黒色土層がのり、その上をまた汚染されていない淡黄色砂がおおう。土層壁面を見る限りでは、最下部の砂層から掘り込む遺構はなく、最も下位の遺構は上部の砂層もしくは黒色土層から掘り込んでいた。これら砂層の上部を、暗褐色～暗灰色を基調とした、しまりの悪い土が厚く覆う。この土層中には、しばしば整地層や焼土層がみられ、人々の営みと共に堆積した生活層であることが知られる。

本調査地点では、部分的に第1面の上を焼土層（厳密には、焼土を均した焼土処理層）がおおっており、第1面と第0面の年代観（第1面…16世紀代、第0面…近世）から見て、博多遺跡群の他の調査地点でも検出されている戦国時代末の焼土層（1580年龍造寺氏による博多焼尖、1586年島津氏による博多焼失）にあたるものと考えられる。

3．発掘調査の方法

発掘調査は、調査区を長辺方向に2分して行なった。これは、調査自体からみれば、A・B各区が狭長になり好ましくないが、掘り下げ時の重機使用、その出入り、発掘調査事務所が調査地点から若干離れた民間アパートの一室であったため、調査器材置き場を調査区内に確保する必要がある点などを考慮した結果である。

各遺構面の設定・掘り下げに際しては、試掘トレンチおよび任意にトレンチを設定し、その土層観察より決定した。ただし有力な鍵層は認められず、若干の誤認があった可能性は考えられる。

遺構は各面ごとに掘り上げたが、井戸・大型土坑等、床面まで掘り下げることで、転落や崩壊の危険がある遺構は、最終面での完掘とし、検出面及び中間の面では、途中で掘り下げを停止した。

4．各遺構検出面の概要

(1) 第1面 (Fig. 5・6)

標高3.0~3.2mで設定した検出面である。現地表から、1.6m前後掘り下げている。

第1面においては、博多遺跡群では希有なことであるが、建物跡を検出することができた。A区において、調査区を南から北に横断する、浅い溝状の凹みが走っている。B区では、この延長を検出できなかったが、おおむねA・B区ともに、この溝のラインを境にして、東側に数回の建て替えをもつ建物跡が、西側には石組土坑を含めた土坑群が分布している。

建物跡については後に詳述するが、比較的大型の礎石を用いた建物（SB01・SB04など）が建てられている点が注目される。これらの礎石や根石をつめた柱穴からは、かなり重厚な建築物の存在が想定される。寺院か、あるいは屋敷か、いずれにしても庶民レベルの建築物ではなかろう。

調査区西側の土坑では、151号遺構が注目される。四壁に石を積み上げた石積土坑であるが、地下室とも言うべき規模をそなえている（P.16)。これに対し、145号遺構は、全体の規模が小さく、石積も低く、浅い。両者は、その長軸線が正しく直交しており、同時に存在していた可能性がある。この他、147号遺構に一部のぞいている石積も、過半がA区とB区のはざまに入り全容を知りえないが、145号遺構よりさらに小規模な方形石積土坑と思われ、やはり方向をそろえている。これらは、おそらくそれぞれ機能を異にして、東側の建物に付属していたのであろう。

また、B区北西辺には、いわゆる瓦溜りの土坑が見られた。調査区東半部分の建物でも、一定量の

Fig. 5 第1面全景 (1)-A区、(2)-B区、(北東より)

Fig. 8 第1面遺構全体図(1/100)

瓦の重量に耐えられるものは、SB01かSB04に限られよう。これらの瓦溜りは、SB01かSB04の解体に際して廃てられたものと考えられる。

第1面の年代は、おおむね16世紀代があてられよう。

(2) 第2面 (Fig. 7・8)

標高2.4～2.6mで設定した遺構検出面である。第1面からは、60cm程度掘り下げている。

第2面においては、第1面のような大型建物の痕跡は、認められない。また、柱穴もほぼまんべんなく調査区全体にひろがっており、敷地の使い分けがあったとは、考えがたい。

第2面では、2基の井戸を検出した。A区の287号遺構は、A区とB区にまたがっていたため、それぞれの区の調査時に土砂崩壊の危険があり、結局掘り下げを断念せざるをえなかった。B区692号遺構は、石積の井側を持つ井戸である。出土遺物による年代観からみて、第1面で検出しそこなった井戸であろう。B区647号遺構は、当初その平面形から井戸と考えていたが、結局あまり深くならずに床面が出てしまい、大型の土坑であることが判明した。B区709号遺構は、第3面の755号遺構（井戸）の井側の直上にあたり、755号遺構の井側を検出していたものと思われる。その場合、709号遺構の周囲で不整形に検出した608号遺構は、井戸の掘りかたの埋土の一部を誤認したものと考えられる。したがって、第3面の755号遺構は、本来第2面に伴う井戸であろう。また、遺構の年代観からみて、第3面843号遺構も、第2面に伴う井戸と考えられる。

第2面の年代観は、14～15世紀にあてられる。

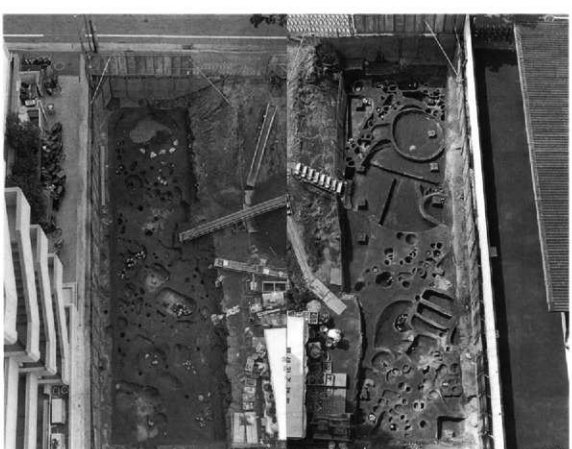


Fig. 7 第2面全景 (1)-A区、(2)-B区(北東より)

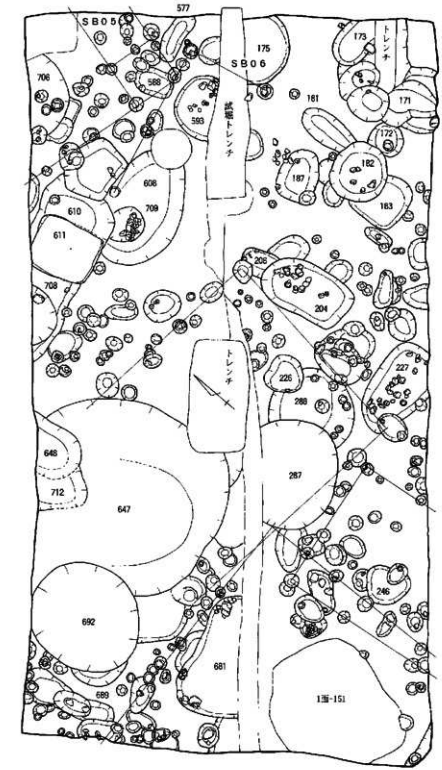


Fig. 8 第2面遺構全体図(1/100)

(3) 第3面 (Fig.9・10)

標高1.9~2.2mで検出した面で、砂丘砂層上面にあたる。第2面からは、40~50cm掘り下げている。

本調査地点での最終遺構検出面であり、これまでに掘り残したり、検出しそこなっていた遺構も、全て第3面であらためて掘り上げた。

第3面では、5基の井戸を検出した。351号遺構は、A区とB区にまたがっており、それぞれの区での調査では土砂崩落の危険があり、掘り下げを断念した。755号遺構は、前述の通り (P.8)、第2面に属する井戸である。846号遺構は、出土遺物から見て16世紀後半の井戸である。846号遺構の上層では、第2面、第1面において、遺構が全く検出できなかった。これは、第1面段階ですでに846号遺構が出土していたものの、これを確認しきれなかったためであろう。したがって、846号遺構は、本来第1面に伴う井戸である。842号遺構は、その大半が調査区外に出ており、調査できなかった。形状からみて、井戸の掘りかたの一部であろう。

第3面においては、埋葬遺構、人骨が多く出土している。305号遺構・306号遺構・782号遺構は土葬墓である。407号遺構は、供献土器の出土と土坑の形状から、421号遺構は土坑の形状とりわけ断面形から土壙墓と判断した。また、304号遺構・480号遺構は、頭蓋骨のみの出土で、349号遺構からも刃物傷を持ち、火を受けた頭蓋骨片が出土した。出土した人骨はあわせて6体分である。これを、博多遺跡群の他の調査と比べると、調査面積に対して、格段に数が多い点が注目される。

第3面の年代観は、11世紀後半から13世紀代である。

Fig.9 第3面全景 (1)-A区、(2)-B区(北東より)

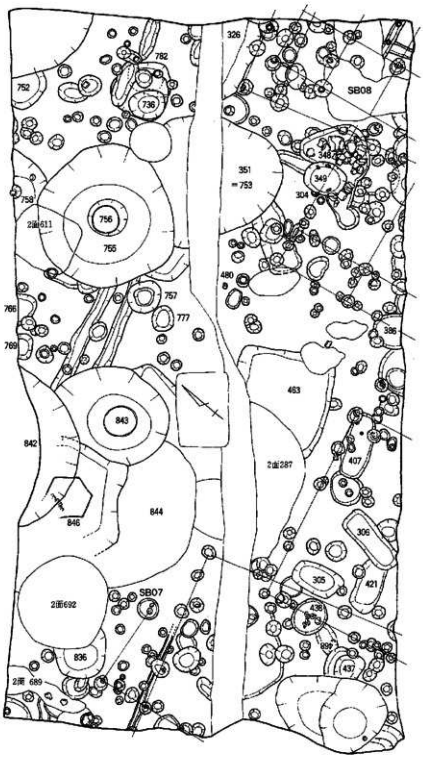


Fig.10 第3面遺構全体図(1/100)

5．遺構と遺物

(1) 建物跡

SB01 (Fig.11～13)

A区第1面で検出した礎石建物跡である。礎石は、板石を据えたものではなく、小土坑に栗石をつめたものである。栗石自体は、礎石の根締めの可能性もあるが、後述するSB04などの様な石を据えた礎石の場合その下には根締めの礫はなく、また栗石をつめたものでその上にさらに礎石を置いた例はなかった。したがって、本調査地点では、栗石を集めたものも、それで直に柱を受けたとみなして、礎石として扱う。

SB01の南側は調査区外にのびており、全体を見ることはできない。そこで、調査区内にかかった部分を検討すると、建物の北西角で礎石を欠くことに気付く。一番北の筋で東から二番目の礎石もないが、これは土坑に切られた可能性がある。さらに北から三列目で東から二番目の礎石も見当ら

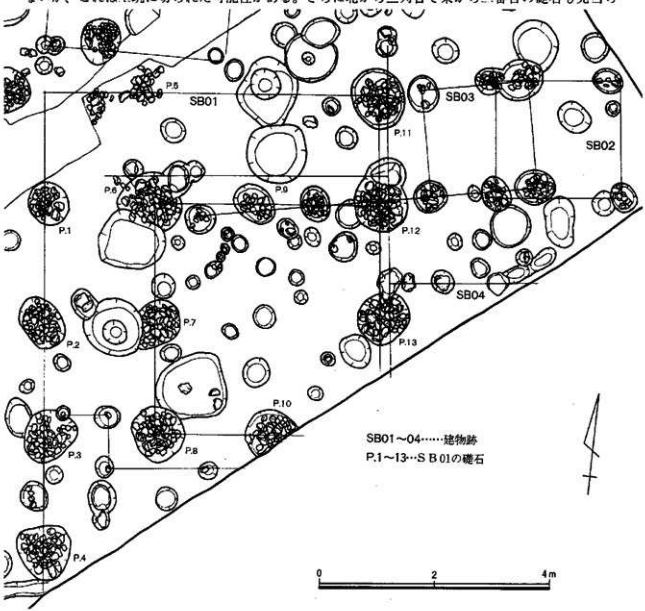


Fig.11 A区第1面検出建物群

ない。そこで、北から二列目と四列目、東から一列目と三列目の柱筋で囲まれた二間×二間の部分を身舎と考えると、身舎の北、西、南の三方に庇を巡らせた建物が復原できる。ただし、南側については、調査区内からは判断する材料がないことを付け加えておく。

個々の礎石は、径75～110cmの略円形の掘りかたに礫をつめたもので、深さは15～25cmをはかる(Fig. 13－(1)～(4))。

柱間の寸法はすべて等しく、梁間・桁行ともに2.0mをはかる。調査区外に延びることも予想される南北方向の柱筋を桁行とすれば、桁行の方向はN－6°30′－Wである。

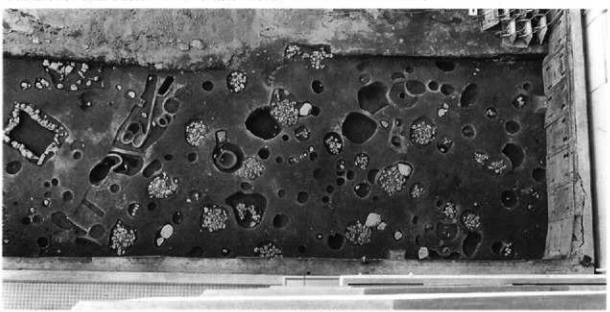


Fig.12 A区第1面遺物跡(南東より)

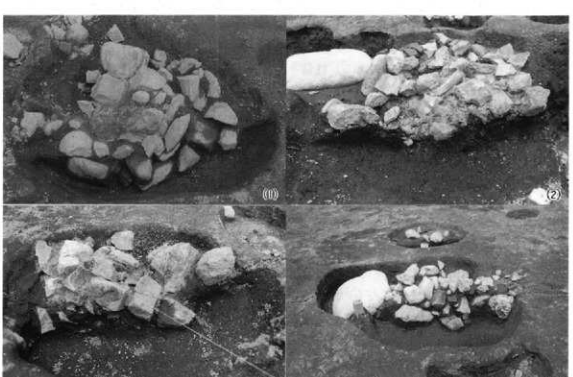


Fig.13 SB01礎石断面 (1)P.3 (2)P.6 (3)P.7 (4)P.12(以上、西より)

SB02 (Fig. 11)

A区第1面より検出した、礎石建物である。径約50cmの略円形の掘りかたに、礫を充填する。南北2.0m、東西2.0mの1間四方を確認した。

ところで、SB02は、柱筋方位はSB01と同じくN－6°30′－Wで、柱間寸法も等しい。SB02からもう一間分西にひろければ、柱筋としては7.5cm程北にずれるが、SB01東辺の北一列目と三列目の礎石に取り付く。その一方で、SB02の礎石はSB01に比べるとかなり小振りである。これらの点から、SB02を、SB01から東に張り出した部分と考えることも可能である。この場合、SB01の北の庇から東へ二間分つき出した中門を想定すれば良いだろう。

ただし、SB02は調査区の東角近くにあり、東にも南にも、さらに延びていた可能性はあろう。そうすると、SB01の中門とするのは無理であり、全く別の建物ということになる。

SB03 (Fig. 11)

A区第1面検出の、礎石建物である。北辺で一間、東辺で一間、南辺で三間分を確認したが、建物としての全体の体裁は、わからない。柱間寸法は、各々1.8mをはかる。柱筋は、最も長く検出した南辺でとると、N－78°－Eとなる。

SB04 (Fig. 11)

A区第1面検出の礎石建物である。40～50cm大の石を配する。すべての礎石が残っている訳ではなく、建物全体を推定させる様な手がかりはない。一応、方位をもとに、柱筋に乗ってくる礎石をひろって推定した建物である。

柱筋の方位は、SB01と同じで、さらにSB01の礎石がSB04の礎石にかぶさっており、SB04からSB01への建て替えが、想定される。

SB05 (Fig. 8)

B区第2面検出の掘立柱建物跡である。柱筋を、N－15°30′－Eにとる。柱間は、南北筋で1.22m、東西筋で1.4mをはかる。

SB06 (Fig. 8)

B区第2面からA区にまたがる礎石建物である。L字形に並ぶ礎石の配置を想定したが、全体の体裁は不明である。柱筋の方位は、N－10°－Wにとる。柱間寸法は、東西筋で東から2.4m、1.85m、南北筋で2.25mをはかる。

SB07 (Fig. 10)

B区第3面より検出した掘立柱建物である。柱根が確認できた柱穴と、これと直交し、左の柱根と同大の柱圧痕を持つ柱穴とを結んだものである。他の遺構に切られているため、4本分の柱穴しか確認できず、建物の全容は知りえない。柱筋を、N－8°－Wにとる。柱間寸法は、東西筋で2.2m、南北筋で南から1.3m、1.15mにとる。

東西筋の柱穴で検出した柱根は、東から径17.5cm、15cmの丸材で、それぞれ3.1cm、6cm分の高さが残っていた。ただし、木質の遺存状態はきわめて悪く、取り上げることは、不可能であった。

SB08 (Fig. 10)

A区第3面より検出した、掘立柱建物跡である。遺構の切り合いと、過半が調査区外に出ると思われるため、建物の全容は知りえない。柱筋を、N－11°－Wにとる。柱間寸法は、すべて1.5mをはかる。

この他にも、建物の一部と思われる柱穴の並びを想定することができる。これら不確実なものについては、Fig. 6・8・10の各検出面遺構全体図中に示すにとどめる。

(2) 石積土坑

145号遺構 (Fig. 14・15)

A区第1面で検出した。長辺170～200cm、短辺135～150cm、深さ30～40cmの長方形の掘りかたの四壁に礫を積み上げる。

石積は、下部に大きい石を転々と据え、その間と上部とを中位の石で積み、さらにそのすき間に小さい石をつめるという方法で組まれている。遺存した限りでは、縦に三～四段を、内側がほぼ垂直になる様につんでおり、礫による裏込めはなされていない。内壁は、直線的にそろえられており、内法で、長辺130cm、短辺96cmをはかる。床面は特に処置されておらず、掘りかたの底面のままとなる。長軸の方位は、N－81°30′－Eにとる。

石積東壁の下段に、**石柱頭部**が用いられていた。(**Fig. 15－(2)**)の方柱形の石造品で、頂部は四周から削り込んで、山形に尖らせる。頭部と方柱部との境は、二段に削って幅広の隆起帯をつくる。

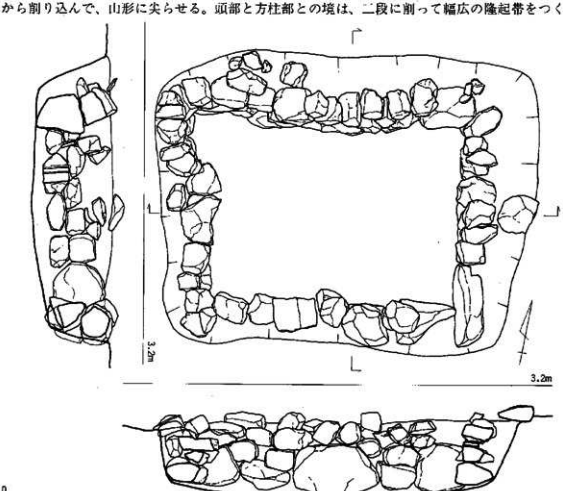


Fig. 14 145号遺構実測図(1/20)

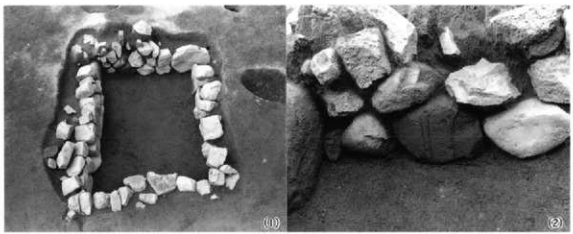


Fig. 15 145号遺構　(1)全景(西より)(2)石柱頭部出土状況(西より)

砂岩製である。表面を観察したが、文字等を刻んだ痕跡はなかった。方柱部で、幅約14cmをはかる。調査時には板碑かと思っていたが、石積解体後取り上げたところ、板碑にしては厚味があり、方柱状をなすことがわかった。石塔とも形態的に異なり、また墓石とする根拠もないので、玉垣に用いる石柱を念頭において、石柱頭部として報告するものである。

145号遺構からは、この他に石白片、土師器片、土鍋片などが出土した。

16世紀代の遺構と考える。

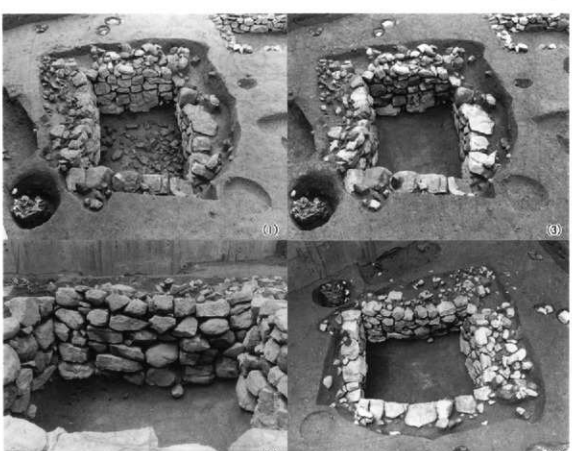


Fig. 16 151号遺構　(1)床面礫群検出状況(南より)(2)西壁石積(東より)(3)完掘状況（南より)(4)間(東より)

151号遺構（Fig.17～19）

A区第1面より検出した。北辺290cm、西辺280cm、南辺220cm、東辺300cm、深さ100～110cmの掘りかたの四壁に礫を積みあげ、石室状につくる。

石積は下段に比較的大きめの石を置き、その上にこれより若干小さい横長の自然石をつみ上げている。直方体に近い形の石を多用する点が特徴で、この時期の石組土坑としては、整ったイメージを与える。石積は、内側に向けて面をそろえており、縦方向・横方向ともに直線的に積まれている。内法寸法は、長辺170cm、短辺136cm、高さ96cmをはかる。石積の背面には、小石で裏込めがなされている。

掘り下げ時、底面近くで礫群を検出した。この礫群は、おおむねレベルをそろえて、ほぼ底面いっぱいに認められたが、きわめて乱雑で、上面を意識的にそろえた形跡はなかったので、意図的に床面として配したものではないと判断した（Fig.16－（1））。

床面は、上の礫群をすべて除去した面で検出した。掘りかた底面のままの素掘りの面である。ただし、礫除去に際して、若干掘りすぎてしまった。これらの点からみて、床面直上の礫群は、151号遺構廃絶時の最初の段階で、石積上部（東壁が他に比べ一段低いので、おそらくこの部分）を崩して、落し込んだものと考えられる。

出土遺物の内、図化できたものをFig.19に示す。1～15は、**土師器**である。1～10は皿で、すべて外底部を回転糸切りする。**1・5・9**は、内底部にナデ調整を加えるが、他は全面横ナデで調整する。1の内底部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたことを示している。10の底部中央

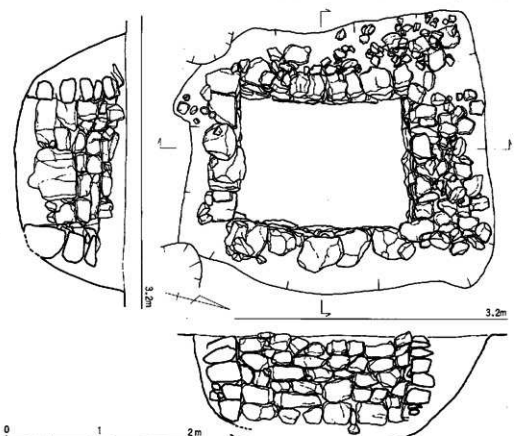


Fig.17 151号遺構実測図（1/40）

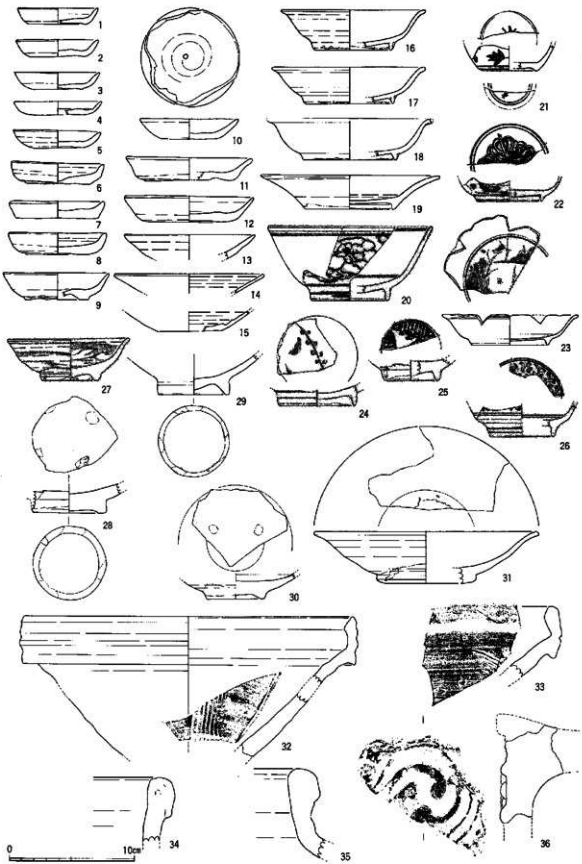


Fig.18 151号遺構遺物実測図(1/3)

には、穿孔がされている。形態的には1～3、4、5・10、6・8、7、9の6タイプに分類することができる。1～3は、体部下位に横ナデによる小さな屈曲を持ち、わずかに外反し、尖り気味の口縁につづく。4は、1～3に類似するが、器高が低い。5・10は、底部からゆるく内弯しつつ立ち上る体部を持つ。体部の立ち上りはゆるく、開き気味である。6・8は、体部中程に明瞭な屈曲を持つ。器肉は厚く、他の二倍近い。焼成はあまい。7は、急角度で小さく立ち上る体部を持つ。器高は浅い。器肉・焼成は、6・7と同様である。9は、形態的には1～3と通じるが、法量的にひときわ大きい。法量的には、1～3が口径6.4～6.8cm、底径3.9～4.2cm、器高1.25～1.35cm、4がそれぞれ7.0～5.1－1.05cm、5～8・10は、7.0～7.8－3.9～6.6－1.35～1.7cm、9が8.9－5.0－2.15cmをはかる。8～9は、器肉が厚く、焼成があまい点で明らかに他のグループと分かれており、生産地を異にする可能性が高い。10～14は、坏である。すべて底部を回転糸切りする。11・12には、内底にナデ調整が加えられている。11・12の法量は、口径－底径－器高それぞれ、10.0－6.7－1.9cm、10.4－5.9－2.1cmをはかる。14・15は、山口県山口市の大内氏関連の遺跡（大内氏館跡、瑠璃光寺遺跡など）で特徴的にみられるタイプである。キメ細かく精良な胎土から、強い横ナデで、きわめて薄く整った体部を作り出す。口径に対し底部が小さく、体部は、大きく直線的に開く。搬入された土師器である。

16～19は、白磁の皿である。16～18の畳付は露胎となり、砂が付着している。19は、碁笥底状に作った高台から、そのまま大きく外反して開く体部を持つ。畳付は露胎である。20～26は、中国明代の染付である。21は小鉢で、底部は浅く碁笥底状に削る。22・23は皿である。23は口縁を花弁状に削り、輪花につくる。

27～31は朝鮮王朝陶磁器である。27は粉青沙器の皿で、畳付に目痕が残る。28・30は、白磁である。見込みと畳付に、胎土目の目痕がつく。29・31は陶器である。29は暗青灰色の不透明釉を施す。畳付に胎土目がみられる。31は皿で、白色の不透明釉をかける。見込みには、砂目がみられる。体部下位から外底部を露胎とする。

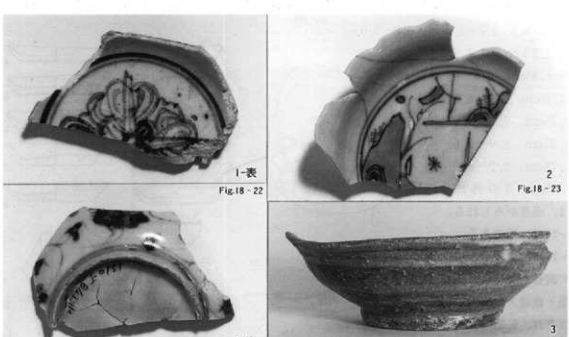


Fig.19 151号遺構出土遺物

32～35は、備前焼きである。**32・33**は、すり鉢で、体部内面にすり目を刻む。口縁内側に屈曲部がつき、口縁は若干下方に突き出して、帯状になる。備前焼き編年で、V期に編年される。**34・35**は、小片のため口径が復原できないが、壺の口縁であろう。玉縁状に肥厚させる。

36は、軒丸瓦の瓦当である。周縁部を欠くが、左三ッ巴と、外区の珠文の一部が残っている。

これらの出土遺物から、151号遺構の年代は、16世紀後半と考えられる。

(3) 土坑

021号遺構（Fig.20～22）

A区第1面で検出した土坑である。SB01の礎石P.8（＝016号遺構）に切られる。長径130cm、短径117cmの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは、18cmをはかる。

Fig.20 021号遺構(東より)

埋土中から、円弧を描いて、礫・土師器・瓦片などが出土している。あたかも、柱材を抱く様な分布および集中の仕方であり、柱を立てた後、その根固めのために掘りかた中に落しこまれたものと推測される。もしそうであるとすれば、中央に立てられた柱材の径は、約25cmとなる。

出土遺物を、**Fig.22**に示す。**1～11**は、**土師器**である。すべて、外底部を回転糸切りする。**1～8**は皿である。**2・4・7**の内底部には、ナデ調整が加えられているが、他は全体を横ナデ調整で整形する。口径－底径－器高の順に法量を示す。6.8－5.2－1.3cm、6.8～7.0－5.2－1.35cm、7.1－5.4－1.35cm、7.6－5.5－1.15cm、7.6－6.0－1.25cm、7.7－5.7－1.55cm、8.0－5.6－1.75cm、8.2－5.9－1.65cm。**1**の外底には、墨書がみられる。**9～11**は、坏である。**9・10**には、内底部にナデ調整が加えられる。口径・底径・器高は、それぞれ、9.5－6.8－2.2cm、10.7～11.7－7.3～7.8cm、13.1－8.

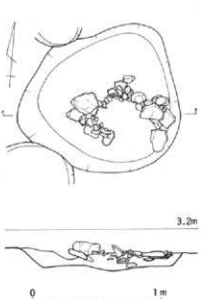


Fig.21 021号遺構実測図(1/30)

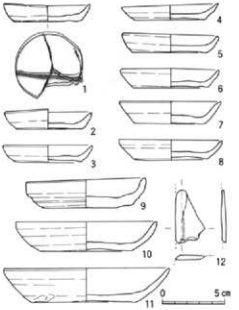


Fig.22 021号遺構遺物実測図(1/3)

1−2, 15cmをはかる。12は、粘板岩製の砥石である。仕上砥であろう。
16世紀代にあてられる。

175号遺構 (Fig. 23～25)

A区第2面で検出した土坑である。一部が調査区外に出るのと、半ばが試掘トレンチに切られているため、土坑の全容は知りえない。残った部分から推定すると、直径190cm前後の略円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは、20cm前後をはかる。

堆土の上位から、完形品の土師器坏、皿

Fig. 23 175号遺構(北西より)

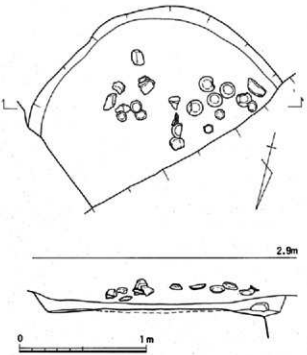


Fig. 24 175号遺構実測図(1/30)

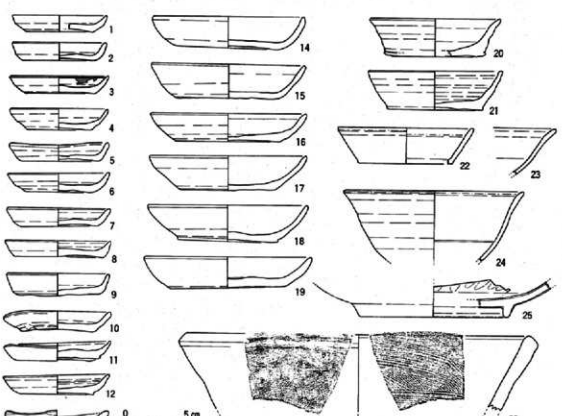


Fig. 25 175号遺構遺物実測図(1/3)

などが出土した。これらは、すべて同レベルに分布しており、土坑の埋積が進んだ段階で置かれた（埋土中におさめられた？）ものと考えられる。

出土遺物を、Fig.25に示す。1～21は、**土師器**である。13を除いて、他はすべて外底部を回転糸切りする。1～13は、皿である。形態的には、手づくり整形による13、体部の立ち上りが急で直線的な2・5・8・9と、その他の3グループにわかれる。13は、回転台を用いずに整形されている。内面と体部外面は、手持ちの横ナデ調整、外底には掌紋がつく。当然ひずみがあるが、口径8.2cm前後、底径6.0cm前後、器高1.4cm前後をはかる。胎土は砂粒を含むものの全体的にはキメ細かく、茶褐色を呈する。畿内からの搬入土器と思われる。1～12は、前述の様に形態的には2タイプあるが、法量的にも胎土・整形技法からみても、両者の間に本質的な違いはない。法量は、口径7.6～8.5cm、底径5.15～6.5cm、器高1.3～1.8cmの範囲内に散在している。なお、3の口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使われたことを示している。14～21は坏である。坏には、ゆるく内弯しながら浅く開く体部の14～19と、急傾斜で直線的もしくは外反気味に立ち上る体部の20・21とがある。両者は、法量的にも全く分れており、前者が口径12.2～12.7cm、底径7.5～9.0cm、器高2.2～2.9cmの範囲にあるのに対し、後者はそれぞれ口径10.4、10.8cm、底径8.0、7.6cm、器高3.0、3.1cmをはかる。16・18・20において、内底ナデ調整がみられる。

22～24は、**白磁**である。22は皿で、口縁を口ハゲにつくる。23・24は、口ハゲの碗である。24の体部内面には、一条の沈線が刻まれる。25は、**青磁**である。龍泉窯系の盤で、体部内面には、菊弁が陰刻されている。全面に施釉し、高台畳付のみ釉を掻き取って、露胎とする。

26は、**瓦質土器**のこね鉢である。内面は刷毛目、外面は口縁部は横ナデ調整、口縁部下はナデ調整、体部下半は、刷毛目調整する。

175号遺構からは、この外、楠葉型瓦器片、和泉型瓦器片、墨書土師器片、陶器片などが出土した。

おおむね14世紀代の遺構であろうか。

表

裏

Fig.27 227号遺構出土遺物

227号遺構（Fig.8・26・27）

A区第2面より検出した土坑である。一部が調査区外に出るが、全体を知るさまたげにはならない。

長辺250cm、短辺140cmの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは、21～41cmをはかる。埋土中には、礫がちらばっている。

出土遺物は、土師器、白磁、和泉型瓦器皿、天目碗、備前焼、鉄製刀子などである。Fig.26・27に示したのは、墨書を持つ**土師器**坏である。外底部は、回転糸切りする。全体を横ナデ

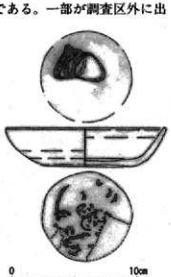


Fig.26 227号遺構遺物実測図(1/3)

調整しており、内底のナデ調整も外底の板状圧痕も見られない。口径12.6cm、底径6.8cm、器高3.1cmをはかる。内底部に、花押を墨書する。外底部にも墨書が認められるが、墨痕は明らかなのだが、内容を読みとれない。絵を描いたものと思われる。

14世紀代の遺構と考えられる。

なお、227号遺構とほぼ同形、同大、同時期の204号遺構が、227号遺構の1m程北にある。ただ、遺構の長軸方向が、227号遺構とは直交する方向を取ることのみ異なるが、これもむしろ両土坑の類似性を強調するものと言える。204号遺構埋土中からは、アワビの貝殻が出土した。食物の残滓を捨てたものと考えられ、227号遺構も同様に廃棄用土坑であったことが推測できる。

Fig.28 348号遺構遺物実測図(1/3)

348号遺構 (Fig.10・28・30)

A区第3面から検出した土坑である。長径195cm、短径150cmの卵形を呈し、深さ約27cmをはかる。

埋土中に、40cm大の大型の礫が置かれていた。特に規格的に配置された様な状態ではないが、大型の礫を3個東辺に置き、その西側に寄せて20cm大の礫を集めており、意図的なものを感じさせた。調査時には不注意にもそれ以上の意を払わず、礫を除去した後も、あらく掘り上げてしまったが、礫群を地上標識とした埋葬遺構の可能性はなかったか。これについては、「まとめ」の章で再考したい。

出土遺物を、Fig.28に示す。1・2・5は、土師器

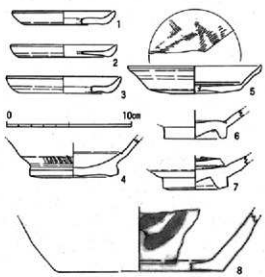


Fig.28 348号遺構遺物実測図(1/3)

Fig.30 304号・348号・349号遺構(北より)

である。1・2は丸底の皿で、底部をヘラ切りする。内底部には、ナデ調整を加える。口径はそれぞれ8.6、9.25cm、器高は1.4、1.35cmをはかる。5は、碗である。内外面とも幅の広いヘラ磨きを施す。3・4は、白磁の玉縁碗である。11世紀後半におかれる。

349号遺構（Fig.10、29、30）

A区第3面検出の土坑である。348号遺構と、後述する304号遺構（P.32）を切る。長径115cm、短径87cmの楕円形を呈し、深さは42.2cmをはかる。

Fig.29－1～3は、土師器の皿である。底部を回転糸切りする。口径－底径－器高は、それぞれ8.1－6.6－1.1cm、8.5－7.0－1.0cm、9.2－7.0－1.3cmをはかる。4は、白磁である。玉縁口縁の碗の底部である。5～7は、青磁である。同安窯系で、5は皿、6・7は碗である。8は、黄釉褐彩陶器の壺もしくは鉢である。外面は露胎。内面は、黄釉を施した上に、褐釉で文様を描く。

この他、人間の頭頂部の骨が出土した。刃による傷を持ち、さらに火熱を受け、焼けていた。

12世紀後半と考えられる。

Fig.31 463号遺構(北より)

Fig.32 546号遺構(南東より)

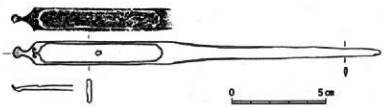


Fig.33 546号遺構出土笄実測図(1/2)

Fig.34 546号遺構出土笄

463号遺構（Fig.10、31）

A区第3面検出の方形竪穴土坑である。第2面287号遺構と290号遺構に切られるが、大体の形状は知りうる。

一辺約2.5mの方形の土坑で、深さは約50cmをはかる。壁は比較的直に近く立ち、床面はほぼ平らで、竪穴住居址の様な形状を持つ。倉庫的な用途の、半地下式の建物を想定することができようか。

土師器・筑前型瓦器・和泉型瓦器・白磁・陶器・瓦などが出土した。

12世紀前半と考えられる。

546号遺構（Fig.6・32～34）

B区第1面より検出した土坑である。一部調査区外となるが、大方は推定できる。推定長径100cm、短径85cmの楕円形を呈し、深さは21cmをはかる。

土師器坏、瓦質すり鉢、瓦などが出土した。Fig.33・34に示したのは、埋土上面から出土した**鍋鍔羽**である。握りの文様部分は、細鑿で魚子に打ち出す。中央部分に、楕円形の剝離痕もしくは折損痕があり、飾り金具を留めていたものと思われる。全長19.5cmをはかる。

16世紀後半の遺構である。

Fig.35 611号遺構(掘り下げ途中段階)(南より)

611号遺構（Fig.8・35）

B区第2面検出の方形竪穴土坑である。長辺177cm、短辺150cmの長方形を呈し、深さは約90cmをはかる。壁はほぼ垂直に立ち、床面は全体として若干南へ傾斜してはいるが、平坦になる。何らかの壁体を当てていた可能性もあろう。

土師器、備前焼（Ⅳ期前半）、青磁（蓮弁文）、白磁（ピロースク型）、天目、陶器、石鍋、などが出土した。

15世紀代におくことができよう。

Fig.36 836号遺構(南東より)

836号遺構（Fig.10・36）

B区第3面で検出した土坑である。第2面692号遺構（井戸）に切られ、3分の1程度を失う。全形を知るのは困難だが、掘りかたの弯曲から推定すれば、推定長径150cm、短径135cmのやや角が張った卵形もしくは隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは、115cmをはかる。円筒形に近い土坑であるが、湧水レベルに達しないこと、井側を設けないことなどから、井戸とは考えられない。用途は確定できないが、とりあえず廃棄用土坑に含めて考えたい。

埋土中より、土師器（回転糸切り）、土鍋、瓦質火舎、東播系須恵器こね鉢、青白磁、白磁、青磁、陶器、銅片、鉄釘などが出土した。白磁には口ハゲの皿が、青磁には龍泉窯系の鎬蓮弁文碗が含まれており、それを下る遺物は見られなかった。これと、土師器や東播系こね鉢の年代観を合わせて考え、14世紀前半頃を836号遺構の年代として考えたい。

土坑には、この他にも看過できない遺構があるが、本書では紙数の関係から割愛せざるをえないことをお断りしておく。

(4) 井戸

692号遺構 (Fig. 8・37～39)

B区第2面で検出した井戸である。ところが、後述する様に、遺構の年代観としては、むしろ第1面に属するべき遺構であった。そこで、第1面を見ると、692号遺構の直上では、何ら遺構らしい遺構を検出しえていないことに気付く。これは、第1面において、すでに692号遺構がそのプランを表わしながらも、調査担当者がこれを確認できなかったために他ならない。したがって、692号遺構は、本来第1面の遺構であったと考えられる。

692号遺構の井戸掘りかたは、長径264cm、短径243cmの楕円形を呈し、その中央に自然石を組み上げて、井側をつくる。

石積は、上に行き次第、若干ながら広がる様に積み上げ、崩壊を防いでいる。石組最下部は、現時点での湧水（本調査地点では標高0.55m）よりも7cm程下から組み始める。特に円形を意識していなかった様で、最下部は不整六角形を呈する。検出した石積は、標高1.7m付近までであり、これから第2面の検出標高2.45mまでの間は石積は見られなかった。井側内に落されていた石もあったが、とてもすべての石積の石が落されたという量には足りなかった。おそらく、上部から石を抜き上げ、上げきれなかった石や、途中で崩れた石が下にたまり、標高1.7m

Fig. 37 692号遺構(1)全景(西より)(2)石積状況(南より)

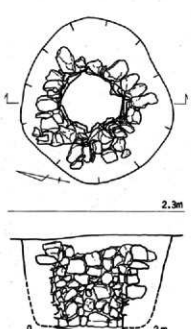


Fig. 38 692号遺構実測図(1/60)

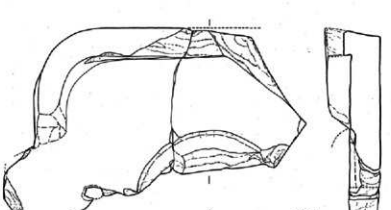


Fig. 39 692号遺構出土鬼瓦実測図(1/4)

付近で、下に落ち込んだ石のため石積の石が抜けなくなり、作業を断念したというところであろう。

Fig.39は、鬼瓦の上縁部分である。この他、土師器・土師質すり鉢・瓦質鍋・土鍋・唐津焼・備前焼・青磁・白磁・陶器などが出土した。

16世紀末から17世紀初頭にかかる時期を想定している。

755号遺構（Fig.40～42）

B区第3面において検出した井戸で、756号遺構が755号遺構の井側にあたる。8頁で述べた様に、第2面の709号遺構が755号遺構の上部、608号遺構が755号遺構の上部にあたる。

掘りかたは、径約380cmの略円形を呈し、掘りかた中央に直径72.5cmの木桶を据えて井側とする。木桶は、49cm分を確認することができた。

Fig.40は、**墨書土師器**の坏である。底部を回転糸切りする。内底部のナデ調整と板状圧痕は認められない。口径11.4～12.0cm、底径8.0cm、器

Fig.40 墨書土師器(1/3)

Fig.41 755号遺構(南東より)

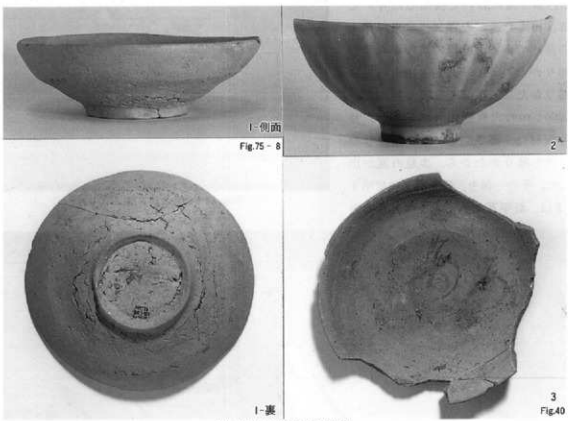


Fig.42 755号遺構出土遺物

高2.4cmをはかる。内底部に墨書がある。仮名文字の「あ」に似る。Fig.42－1・2は、**早島式土器（吉備系土師質土器）**の椀である。この他、4点の早島式土器が出土した。3は、**青磁**である。龍泉窯系の碗で、体部外面に鎬蓮弁文を配する。全面施釉で、高台畳付のみ露胎とする。

この他、口ハゲの白磁皿、高麗青磁、東播系須恵器こね鉢、陶器などが出土している。おおむね、14世紀前半にあてることができよう。

843号遺構（Fig.10・43）

B区第3面で検出した井戸である。長径3.2m、推定短径2.7mの楕円形の掘りかたの中央に直径85cmの木桶を据えて、井側とする。木桶は、高さ40cm分を確認した。

843号遺構は、後述の通り15世紀代の井戸である。また第3面においては、第2面の647号遺構を切る形で検出されたことを考えれば、本来は第2面に伴った井戸ということになる。

土師器、白磁、青磁、陶器、朝鮮王朝白磁、石鍋などが出土した。

15世紀代の遺構と考えられる。

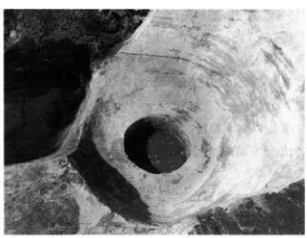


Fig.43 843号遺構（南より）

846号遺構（Fig.10・44～46）

B区第3面において検出した井戸である。10頁で述べた様に、本来は第1面の井戸である。遺構の重複から全形を知りがたいが、一辺約2mの六角形の掘りかたに、板材を立てて組んだ、一辺60cmの六角形の井側を持つ。井側の板材は、高さ55cm分を確認した。

井戸の掘りかたから、多量の瓦が出土した。その一部を、Fig.45・46に示す。1・2は、**軒平瓦**である。3は**丸瓦**であ

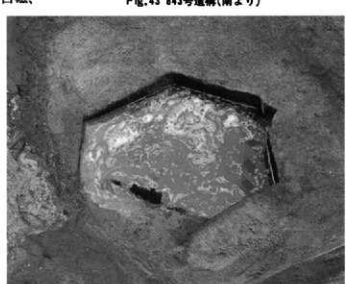


Fig.44 846号遺構井側（西より）

Fig.45 846号遺構出土軒平瓦

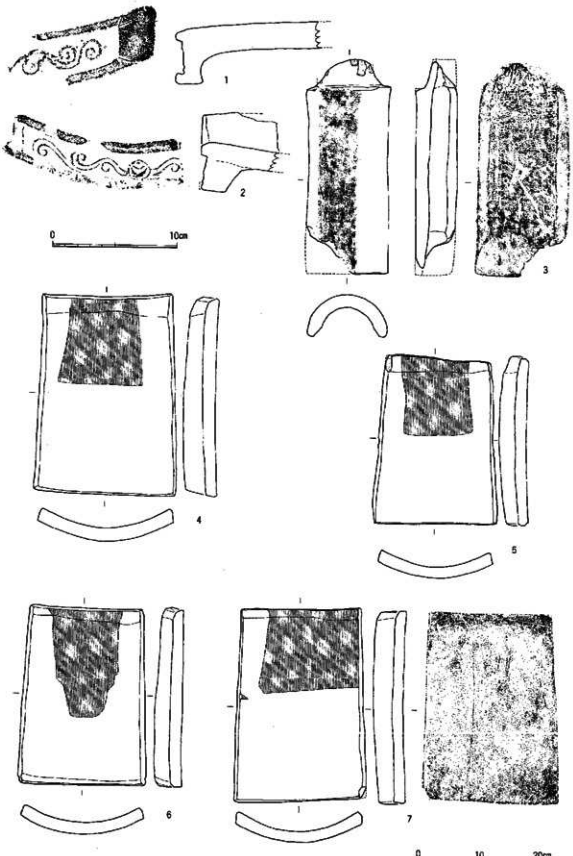


Fig.46 848号遺構遺物実測図(1/3,1/6)

る。上面は縄目をナデ消し、内面には布目が残る。4～7は、平瓦である。それぞれの上面には、炭素の吸着が良く暗灰色を呈した部分が、影状についている。これを見ると、4・7は平瓦の角、5・6は丸瓦の形をしている。焼成時の重ね焼きによるものであろう。

この他、土師器・土鍋・瓦質土器・備前焼・青磁・白磁・朝鮮王朝陶磁器などが出土した。なお、瓦は井側内からは全く出土していない。

16世紀後半の井戸である。

(5) 瓦溜り

B区第1面からは、多量の瓦を廃棄した土坑、いわゆる瓦溜りが検出された。508号遺構、512号遺構、545号遺構、548号遺構、555号遺構などが、それにあたる。特に土坑の説明をする必要はないと思うので、主要な瓦の一部をFig.48・49に示すにとどめる。2と3の瓦当文様は同范である。

16世紀後半の瓦であろう。

Fig.47 瓦溜り(1)508号遺構(北西より)(2)548号遺構(南東より)

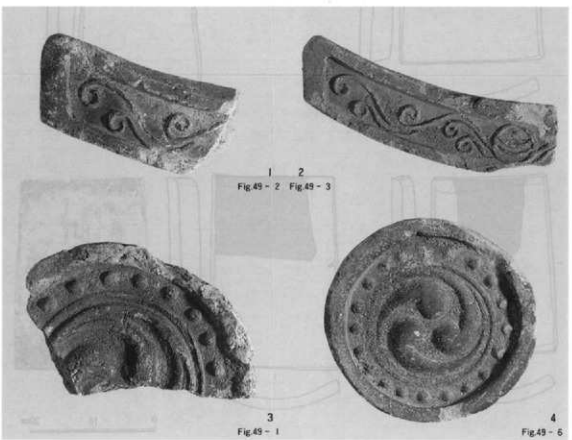


Fig.48 瓦溜り出土瓦当

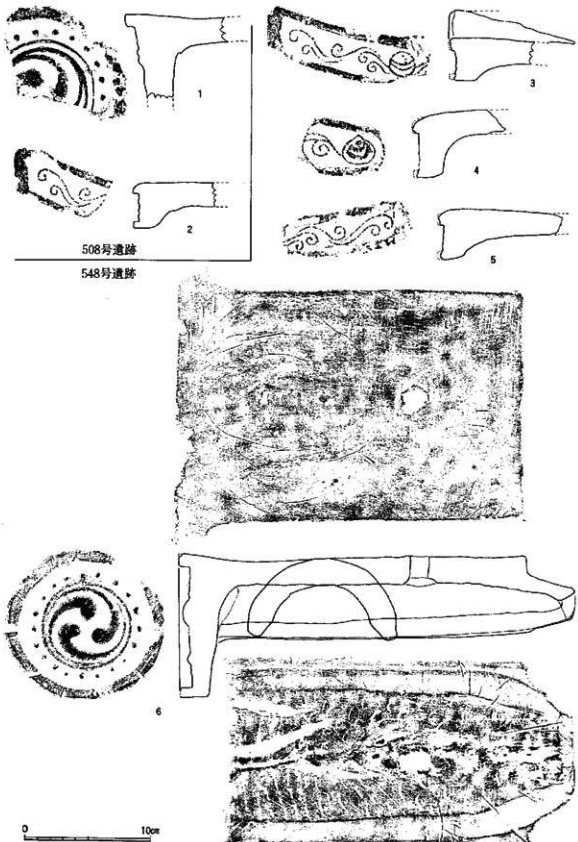


Fig. 48 瓦溜り出土瓦実測図(1/3)

(6) 埋葬遺構

304号遺構（Fig.10・50・51）＝3号人骨

A区第3面で検出した頭頂部から後頭部にかけての骨である。本来は土葬墓であったと思うが、掘りかたは検出できなかった。顔面部分から下を349号遺構に切られる。したがって、12世紀後半以前の埋葬である。

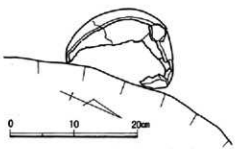


Fig.50 304号遺構実測図(1/8)

Fig.51 304号遺構(北東より)

305号遺構（Fig.10・52～56）＝2号人骨

A区第3面より検出した土壙墓である。土壙は、長辺110～130cm、短辺70～80cmの、若干ひずんだ隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは32cmをはかる。土壙の床面はほぼ平らで、壁はゆるく立ち上る。

人骨の遺存状態はきわめて悪く、頭蓋骨は土圧でひずんでいたが、埋葬姿勢を知ることはできた。すなわち、上半身から腰までは土壙床面につけ、脚はあぐらをかく様に深くおりまげて土壙壁にもたれかけさせている。頭はまっすぐにおこして脚の方向を見つめ、両手は右手を下にして胸の上で

Fig.52 305号・306号遺構(南より)

組んでいた。土壙の主軸はN－12°30′－Wだが、遺体の頭位は、磁北に一致していた。

遺体の頭部の向って左側には、和泉型瓦器の碗と皿が各1枚、供献されていた（Fig.54）。

Fig.55に示したのは、供献された**和泉型瓦器**である。1は皿で、内面には太いヘラ磨きが密に施される。外面には、ヘラ磨きは及ばない。2は埦である。内面は、ナデの上にあらく暗文を施す。外面にはヘラ磨きはなく、口縁部付近は横ナデ、体部には掌紋および指頭圧痕が全面に残る。

13世紀前半代が考えられる。

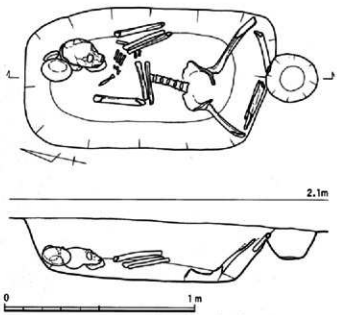


Fig.53 305号遺構実測図(1/3)

Fig.54 305号遺構瓦器出土状況

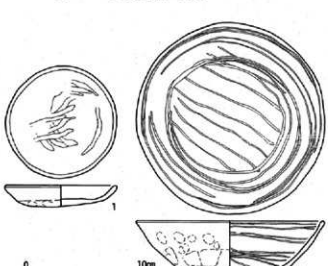


Fig.55 305号遺構遺物実測図(1/3)

Fig.56 305号遺構出土瓦器

306号遺構 (Fig.52・57～59)
＝1号人骨

A区第3面で検出した木棺墓である。長辺1.8m、短辺0.6mの長方形の掘りかたを持つ。出土した鉄釘の分布からみて、長側170cm、小口45cm、高さ20cm以前の木棺を置いたものと思われる。

木棺内には、遺存状態は悪かったが、人骨が残っていた。右肩を下にし横向きに寝て、手足を折りまげた右側臥屈肢葬である。木棺の主軸、人骨頭位ともに、N－5°－Eであり、北枕西向の埋葬と言える。

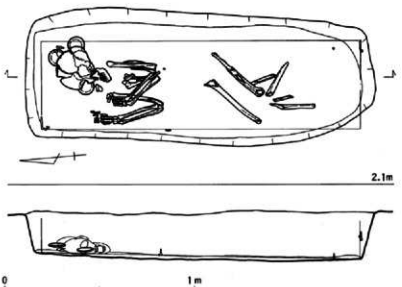


Fig.57 306号遺構実測図(1/20)

遺体の頭の下に、3枚の**土師器皿**が供献されていた (**Fig.58**)。いずれも外底部回転糸切りで、板状圧痕を持ち、内底部にナデ調整を加える。口径－底径－器高は、それぞれ、8.5～8.7－6.3～6.6－1.25cm、8.9－6.8－0.95cm、8.8～9.0－5.7～6.0－1.2cmをはかる。

13世紀前半に位置づけることができる。

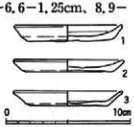


Fig.58 306号遺構土師器(1/3)

Fig.59 306号遺構土師器皿出土状況(南東より)

349号遺構 (前述24頁) ＝4号人骨

349号遺構は土坑であり、埋葬遺構ではないが、人間の頭頂骨の一部が出土している。後頭部よりの頭頂から右にかけての骨で、一端に刃物による傷を持ち、さらに火熱にあい焼けている。

407号遺構 (Fig.60～63)

A区第3面より検出。供献と考えられる土器の出土により、土壙墓と判断した。長辺181cm、短辺70cmの隅丸長方形を呈する。しかし、床面は途中段差をなしており、またプラン的にもふたつに別れる様なので、Fig.61の右半分、長辺120cm、短辺68cm、深さ19cmの隅丸長方形部分を土壙墓掘りかたとみるべきだろう。N－82°－E。

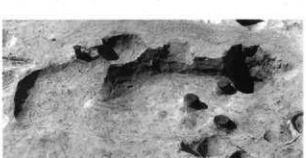


Fig.60 407号遺構(南東より)

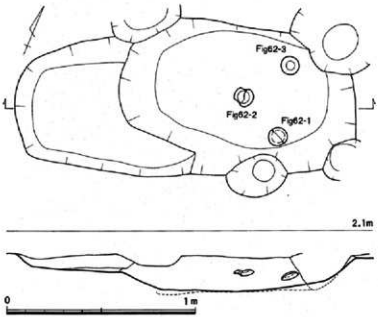


Fig.61 407号遺構実測図(1/20)

Fig.62 407号遺構遺物実測図(1/3)

Fig.63 407号遺構出土和泉型瓦器皿

埋土中位から、供献と思われる遺物が出土した。Fig.62－1・2は、土師器の皿である。1は底部を回転ヘラ切り、2は回転糸切りする。ともに内底部にはナデ調整を加える。口径－底径－器高は、それぞれ9.1～9.2－6.8～7.2－1.55cm、10.0～10.1－7.0～7.3－1.6cmをはかる。3は和泉型瓦器の皿である。内面には、幅広で単位のとらえにくいヘラ磨きが施される。

12世紀前半と考えることができよう。

Fig.64 421号遺構断面(南西より)

421号遺構 (Fig.10・64)

A区第3面で、306号遺構に切られて検出

された土壙である。土壙断面が隅丸の箱型を呈することから、土壙墓の可能性を考えた。長辺で135cm以上、短辺65cm、深さ37cmの隅丸長方形を呈する。

小片ではあるが、土師器、同安窯系青磁、白磁などが出土しており、12世紀後半代にあてられる。

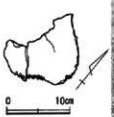


Fig.65 480号遺構実測図(1/8)

Fig.66 480号遺構(南より)

480号遺構 (Fig.10・65・66)
＝5号人骨

A区第3面で検出した。右側頭部の人骨が、内面を下に向けて出土したものである。墓壙等は、全く検出できなかった。

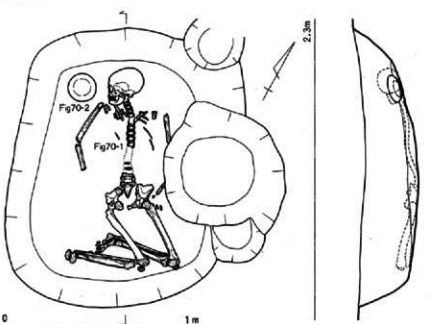


Fig.67 782号遺構実測図(1/20)

782号遺構 (Fig.67～71)
＝6号人骨

B区第3面で検出した土壙墓である。長辺145cm、短辺120cmの隅丸方形を呈し、深さは28cmをはかる。

土壙内より、人骨を検出した。仰臥して、下肢を折り曲げる。顔は右肩に接する程に横を向いている。頭位はN－28°30′－Eにとり、おおむね北枕西向と言える。

遺体の頭部西側に、土師器の坏が供献されていた。**Fig.70－1**に示したのがそれで、底部を回転糸切りし、内底部にはナデ調整を加え

Fig.69 782号遺構(南東より)

Fig.68 782号遺構人骨埋葬状況(南西より)

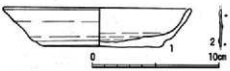


Fig.70 782号遺構遺物実測図(1/3)

Fig.71 782号遺構出土遺物

る。外底部には、うすく板状圧痕がみられる。口径14.9～15.1、底径9.8～10.0、器高3.1cmをはかる。2は遺体の胸付近から出土した針状の鉄製品である。両端は折損する。現存長2.9cm、径0.07～0.1cm。

おおむね、12世紀後半代に属する遺構である。

(7) その他の出土遺物

これまで述べてきた以外の遺構や包含層出土の遺物の中から、若干を紹介する。

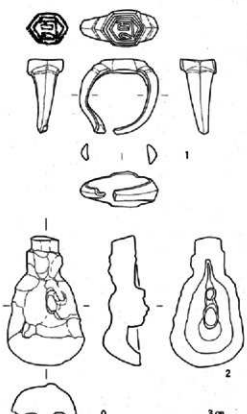


Fig.72 その他の出土遺物実測図(1/1)

Fig.73 バスパ文字銅印指輪

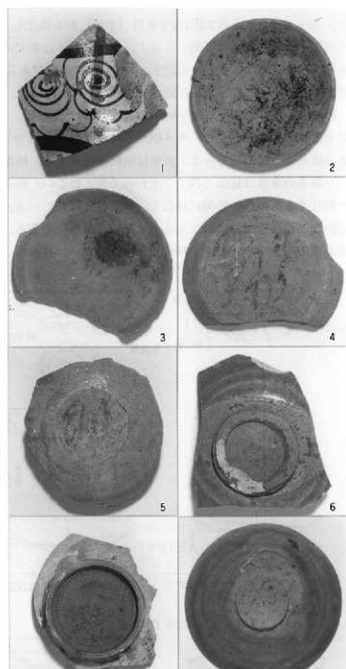


Fig.74 その他の出土遺物

Fig.72－1は、銅製指輪である。中央にパスパ文字の印面を持つ。「記」・「既」など、「キィ」という音の文字を示す（筑波大学　加藤晋平氏御教示）。正字で彫られている為、捺すと逆字になる。指輪部分は、輪にならず、爪状を呈する。右側の爪が若干ひずんでいるのは、使用者の指の大きさにあわせて、調整したためであろうか。B区第2面689号遺構（土坑）からの出土で、他の出土遺物からみて14世紀前半に置くことができよう。2は、銅製懸仏である。表面は摩耗し、細部は見てとれないが、右手を右膝に、左手を胸にして印を結んだ座像である。頭部の表現から、十一面観音像であるという（福岡市教委、佐藤一郎氏御教示）。Fig.74－1は、磁州窯の白釉褐彩の壺の破片である。2～8に、墨書の例を示す。2は土師器の皿で、内面に墨痕がある。内容不明。3・4は同一土師器皿の内面と外底である。両面とも仮名文字を数行にわたって記す。現時点では、解読できていない。2～4は、A区第2面173号遺構（土坑）から出土した。13世紀後半～14世紀前半。5は、白磁の皿である。外底部に「網」と記す。網首もしくは網司の略である。6は、同安窯系青磁碗である。体部下位の露胎部に「上」と記す。7は、白磁の碗である。高台内側に「大靖ゐ」と示す。8は白磁の皿である。外底に「大」と記す。

Fig.75に示したのは、国内各地から搬入された土師器、瓦器類である。1・2は、京都系の土師器である。ともに灰白色で、キメ細かく精良な胎土を持つ。手捏ねで、2はいわゆるヘソ皿である。3は防長系土師器坏である。底部は回転糸切りする。体部外面は横ナデ、見込みはヘラ磨きをする。ヘラ磨きの条線は幅広で浅く、きわめて見えにくい。断面逆台形の低平な高台が、底部から体部へと変化する転換点の外側に接して、貼り付けられている。4は、山口県山口市の大内氏館や瑠璃光寺跡などから特徴的に出土するタイプの土師器坏である。小さな底部から大きく開く体部を持つ。胎土は白茶色でキメ細かく精良で、焼成も良い。外底内には、解読できないが、墨書が認められる。

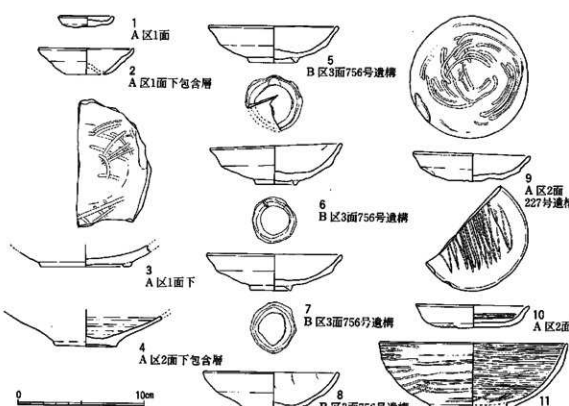


Fig.75　搬入土師器・瓦器実測図(1/3)

5～8は、早島式土器塊（吉備系土師質土器）である。内面はコテなでにより、平滑に整えられる。5～7の高台は貼付が雑で形も崩れているが、8の高台は正円形で形が整う。器高をとっても8がやや深目で5～7に前出するものか。ただし、この5～8はすべて前述したB区第3面756号遺構からの出土である。9～11は、畿内産瓦器である。9は和泉型、10・11は楠葉型である。

次に、出土銭をまとめておく。本調査地点からは、合計106枚の銅銭が出土したが、半枚以上が錆のため解読できなかった。なお、近世の面であり、表土剝ぎ直後の面である0面（表面があれていたため、遺構検出は試みなかった）から、「慶長通寶」が出土した。「寛永通寶」以前の国産銅銭として知られるが、出土例は全国的にも少ない。徳川家康による試作銭とも私鋳銭とも言われており、出土が注目される銭である（Fig.76　裏表紙写真）。

Tab.1 出土銅銭一覧表

銭貨名	初鋳年	時代	枚数	銭貨名	初鋳年	時代	枚数	銭貨名	初鋳年	時代	枚数	銭貨名	初鋳年	時代	枚数
開元通寶	621	唐	1	皇宋通寶	1037	宋	3	元符通寶	1098	宋	2	宣徳通寶	1433	明	1
太平通寶	976	宋	1	熙寧元寶	1068	宋	2	宣和通寶	1119	宋	1	慶長通寶	1606	江戸	1
咸平元寶	998	宋	1	元豊通寶	1078	宋	5	大中通寶	1361	高麗	1	寛永通寶	1636	江戸	6
祥符元寶	1008	宋	1	元祐通寶	1086	宋	4	洪武通寶	1368	明	2	一　銭	1877	明治	1
大型元寶	1023	宋	3	紹聖元寶	1094	宋	2	永樂通寶	1408	明	4	解読不能			61

※明の太祖朱元璋が建国前、呉王を称していた時の鋳造（1361～1367）

Tab.2 遺構別銅銭一覧表

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考	面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考	面	遺構番号	銭貨名	枚数	備　考
0面	002	解読不能	1		1面	521	解読不能	1		2面	277	解読不能	1	
1面	015	解読不能	1		〃	532	解読不能	1		〃	284	天聖元寶	1	
〃	021	元豊通寶	1		〃	546	解読不能	1		〃	577	元豊通寶	1	
〃	070	祥符元寶	1		〃	555	解読不能	1	2枚重	〃	608	解読不能	1	
〃	091	解読不能	1		〃	〃	解読不能	1		〃	609	解読不能	1	
〃	〃	解読不能	1		〃	〃	宣徳通寶	1		〃	611	太平通寶	1	
〃	093	祥符元寶	1		〃	〃	解読不能	1		〃	611	解読不能	1	
〃	〃	解読不能	1		〃	566	解読不能	1		〃	619	解読不能	1	
〃	098	祥符元寶	1		2面	171	解読不能	1		〃	〃	解読不能	1	
〃	109	□通□寶	1		〃	〃	元豊通寶	1		〃	647	解読不能	1	
〃	112	解読不能	1		〃	174	解読不能	1		〃	688	解読不能	1	
〃	141	咸平元寶	1		〃	175	紹聖元寶	1		〃	692	解読不能	1	
〃	142	解読不能	1		〃	〃	解読不能	1		〃	〃	解読不能	1	
〃	143	元祐通寶	1		〃	204	元符通寶	1		3面	351	解読不能	1	
〃	151	永樂通寶	1		〃	212	解読不能	1		〃	〃	紹聖元寶	1	
〃	〃	洪武通寶	1		〃	〃	解読不能	1		〃	461	熙寧元寶	1	
〃	〃	解読不能	1	石組内	〃	〃	祥符元寶	1		〃	494	元符通寶	1	2面下～3面
〃	156	寛永通寶	1		〃	〃	解読不能	1		〃	692	解読不能	1	
〃	159	解読不能	1		〃	〃	解読不能	1		〃	842	洪武通寶	1	
〃	〃	元祐通寶	1		〃	220	元豊通寶	1		〃	844	皇宋通寶	1	
〃	160	□□通寶	1		〃	250	解読不能	1		〃	846	解読不能	1	
〃	502	寛永通寶	1		〃	265	解読不能	1		〃	〃	開元通寶	1	
〃	520	解読不能	1											

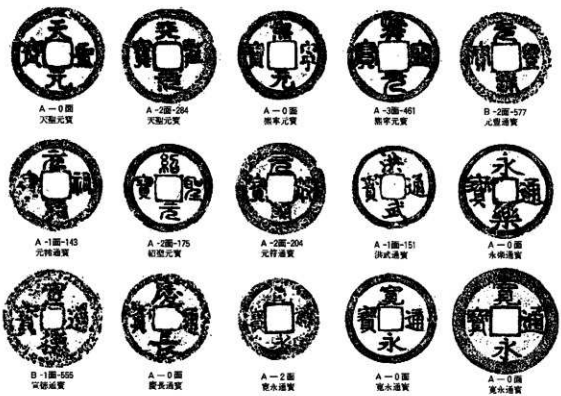


Fig. 76 出土銅銭拓影(1/1)

第三章　まとめ

博多遺跡群第78次調査の概要報告を終えるに当たって、これまで述べてきた成果を箇条書きにまとめるとともに、若干の私見を追加して、総括としたい。

1．本調査地点における遺構の出現は、11世紀後半にある。
2．12世紀後半から13世紀前半にかけて、ほぼ継続して土葬墓が営まれていた。
3．16世紀後半頃、大規模な建物が、相継いで建築された。
4．中世を通じて、建物の主軸方位は、おおむね北を指していた。
5．出土遺物では、12世紀から13世紀前半にかけて、現在の大阪府下で生産されていた和泉型瓦器の出土が目立つ。さらに、パスパ文字の印面を持つ銅製指輪、慶長年間にわが国でつくられたと言う銅銭「慶長通寶」が出土した。

調査地点の立地と遺構の出現について

第78次調査地点は、息浜砂丘の西の端に位置する。息浜は、博多浜に遅れて、12世紀後半から13世紀頃になって都市化した地域である。その都市化は、12世紀初め頃博多浜と息浜を陸橋状につないだ埋立によって引き起こされたもので、埋立地周辺から都市化が進んだとすれば、息浜西端に当たる第78次調査地点付近は、もっとも都市化が遅れたところだろう。

本調査で11世紀後半と位置づけた遺構は、前章で報告した348号遺構なのだが、小範囲に面を揃えて石をおく点、これを切り込んだ349号遺構の埋め土から、火にかかって焼けた頭蓋骨片が出土した点などから、埋葬遺構であった可能性が考えられる。

ところで、本調査地点では12世紀から13世紀前半にかけての土葬墓が、4基検出されている。博

多遺跡群においては、これまで埋葬遺構が検出されても、ほとんどが単独出土であり、いわゆる屋敷墓と同列の現象と理解されている（大庭1992)。それらと比べた時、本調査地点における埋葬遺構の密度は、例外的なほどに高いといえる。

また、304号遺構、480号遺構など明確な掘り方を持たずに砂丘上面から出土した人骨もある。304号遺構については、その出土状況から、原位置を保つものと考えられる。これら埋葬行為を伴わない人骨が、それでも葬送行為の結果であるとしたら、第78次調査地点での葬送の密度はさらに高いものとなり、埋葬遺構を伴う墓（地上標識を想定することもできる）のかたわらに、野辺の送りを済ませた遺体が放置されていたことになる。

これに、餓鬼草紙に描かれたような中世の墓地の姿を重ねることも可能であろう。古代末から中世初めの第78次調査地点は、博多の葬地だったのかもしれない。

埋葬遺構について

本調査地点からは、木棺墓１基（306号遺構)、土壙墓２基（305号遺構、782号遺構)、人骨の出土はないが供献遺物から土壙墓と判断されるもの１基（407号遺構)、土坑特に断面の形状から土壙墓と判断したもの１基（421号遺構）の、計５基の土葬墓が検出された。

これを埋葬頭位から分けると、主軸を北東－南西にとるもの（407号遺構、421号遺構)、頭をほぼ北に向けるもの（305号遺構、306号遺構、782号遺構）に分かれる。

人骨が遺存したものについて、埋葬姿勢を見ると、仰臥屈肢葬（305号遺構)、右側臥屈肢葬（306号遺構)、仰臥屈肢葬（ただし西面、782号遺構）とまちまちである。

供献遺物は、全体的にかなり特異な様相を示している。すなわち、博多遺跡群のこれまでの土葬墓の例では、土師器の杯・皿と輸入磁器の碗・皿を組み合わせて供献している。これは、全国的な傾向とも一致する（橋田1991)。これに対し、305号遺構では瓦器の碗・皿、306号遺構では土師器の皿のみ、407号遺構では土師器の皿と瓦器の皿、782号遺構では土師器の杯のみと、まったく異なっている。しかも、これらの供献された瓦器は和泉型瓦器で、博多では出土例の少ないものであった。これらの搬入瓦器については、次の項でふれるが、基本的には屋敷墓と変わらないとされる博多の土葬墓の中にあって（大庭1992)、本調査地点の例は明らかに異質である。あるいは、前項で検討した博多の葬地としての本調査地点のあり方と関わるのかもしれない。

出土瓦器について

本調査地点からは、前述した土葬墓を初めとして、多数の和泉型瓦器が出土した。これまで、博多遺跡群では、搬入瓦器としては楠葉型瓦器の出土が大多数を占め、和泉型の出土はごく少数しか報告されていなかった。ちなみに、築港線関係第３次調査出土の瓦器を数えた橋本久和氏によると、在地産（筑前型）349点（60.9%)、畿内産（楠葉型）224点（39.1%）で、和泉型の出土はなかった。

これに対し、本調査地点では、在地産（筑前型）538点（61.2%)、畿内産341点（38.8%）を数える。畿内産瓦器の比率は、築港線関係第３次調査地点と近似するが、両者とも博多遺跡群の中では例外的に畿内産瓦器の比率が高い地点であり、通例は10%にもみたない。さらに畿内産瓦器の内訳は、楠葉型64.5%、和泉型35.5%である（ただし、楠葉型瓦器は、１期および２期に限られるのに対し、和泉型瓦器は、２期・３期のものである点は注意を要する)。

博多遺跡群ではこのように多量の和泉型瓦器が出土することは希であり、相対的に畿内産瓦器の占める比率が高い点とともに今後の検討課題としたい。

第78次調査地点の歴史的な立地

本調査地点の含まれる息浜西端には、室町時代には、石城山妙楽寺があった。妙楽寺は、遣明使節や明・朝鮮からの使節がしばしば滞留した寺で、室町幕府の対外公館的な役割を果たしていた。その後、戦国時代の兵火に焼かれ、江戸時代になって博多浜に移された。

妙楽寺の故地は、近世以後、妙楽寺町と呼ばれた。江戸時代の町を現在の地図に落とすとFig. 77のようになる。それによると、本調査地点は、上対馬小路に含まれる。また、Fig. 77には、第68次調査で検出された元寇防塁の位置も示した。これを見れば明らかなように、妙楽寺町は元寇防塁の推定線で二分されている。石城山の号の石城とは、元寇防塁に他ならないし、博多の市街が容易に防塁の外に出ようとしなかったことを見れば（大庭1995）、妙楽寺の寺域も、北側を防塁で画されていたものと考えて、大過ないだろう。妙楽寺のかつての寺域の広がりを示す資料はないのだが、元寇防塁の南側に本来の寺域を設定するならば、妙楽寺町から対馬小路・中対馬小路の一部にかけての範囲が想定され、本調査地点は、妙楽寺の南に近接していたことになる。

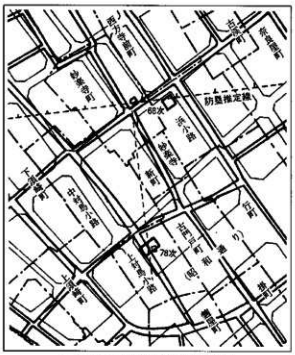


Fig. 77 旧町名配置図(約1/4,000)

ところで、第68次調査とその西側の工事立会で検出された防塁の方向性を見ると本調査で検出した建物群と直交することに気づく。本調査地点付近の町場は、元寇防塁（＝海岸線）に規制されていたのであろう。さらに、防塁と本調査地点の間には、妙楽寺がはまっていた訳だから、当然妙楽寺も防塁に規制された軸線をとっていたと推定できる。

次に、第1面検出の建物の性格について考えたい。まず言えることは、その規模・構造からみて、庶民レベルの町屋ではないと言うことである。さらに、たびたび建て替えつつも、同じ場所におそらく同じような規模で営まれた点にも注意しなくてはならない。SB01は、建て替えられた一連の建物の、最後の姿であろう。これをみると、一連の建物は、その盛期において突然に廃絶されたことになる。以下は、推測でしかないのだが、SB01を二間三面の仏堂とみて、妙楽寺の南に立地することから、戦国時代の兵火で妙楽寺とともに焼失したその搭頭と考えたい。

本調査の示す検討課題は、とてもこれだけに留まらない。14世紀前半代の遺物とともに出土した、パスパ文字印の指輪にしても、調査・研究の必要がある。本書では、紙数の関係からこれで筆を置かざるをえないが、別の機会をえて、検討を試みたい。

大庭康時　1992「博多遺跡群の埋葬遺構について」『法哈哇』第1号　博多研究会
1995「中世都市から近世都市へ－発掘成果から見た16・17世紀の博多」『福岡県地域史研究』13号福岡県地域史研究所
橋出正徳　1991「尾数整試論」『中近世土器の基礎研究VII』中世土器研究会
橋本久和　1992「中世土器研究序論」真陽社

博多遺跡群第78次調査出土の中世人骨

九州大学比較社会文化研究科
中橋孝博

はじめに

古い歴史を持つ博多の町からは、様々な遺構、遺物と共に、かつてこの街に居住していた人々の遺骨が出土することが多い。これまでも古代から近世期にいたる幅広い時代の古人骨が出土しており、特に近世人については他地域の同時代人との類似性や違いがある程度判明し、そうした特徴の成因についても考察が加えられて来た（中橋、1987）。古代から中世期にかけてはしかし、僅かに数体の検討可能な資料を得ているのみで、まだまだその実態は明らかではない。当地域は言うまでもなく、渡来系弥生人の密集地であり、その住民の形質における時代変化を明らかにすることは、日本人の成立に関する積年の課題を検討する上でも重要な知見を提供しよう。

1992年度の福岡市教育委員会による旧博多市街区での発掘調査によって、新たに中世期の人骨が出土した。骨の保存に適さぬ酸性度の強い砂地に埋葬されていたため、骨の脆弱化、小片化が著しく、詳しい形質の検討はできなかったが、幾つかの知見を追加できたので、以下にその検討結果を報告する。

遺跡・資料・方法

博多遺跡群第78次発掘調査は、福岡市博多区古門戸町28、29番地にて、1992年夏に実施された。かつての海岸にも近い、いわゆる沖浜の南西端に位置し、12、3世紀以降の地層から柱穴や井戸等の遺構、および畿内瓦器など多数の遺物が出土した。

埋葬遺構、人骨は、当遺跡の最下層に近い地点から、種々の副葬品と共に検出された（表1）。1基の木棺墓と土壙墓が2基ふくまれるが、その他は土壙や埋葬遺構の不明瞭なところに頭蓋片だけが見いだされるという、やや不自然な状況で出土した。

所属時代は、人骨に伴う土師皿などの考古学的考察から、いずれもほぼ鎌倉時代の、12、3世紀所属の人骨と考えられている。

計測はMartin-Saller（1957）に従った。性別の判定には保存不良骨に対する筆者らの方法を援用した（中橋、1988）。

表1　博多遺跡群第78次調査出土中世人骨

番号	性	年齢	時代	埋葬施設	頭位	埋葬姿勢	副葬品	備考
1号	女性	熟年	13C初期頃	木棺墓	北	右側臥屈肢	土師皿3	
2号	(男性)	(熟年)	13C前半	土壙墓	ほぼ北	仰臥屈肢	和泉型瓦器碗1，皿1	
3号	(男性)	(熟年)	～12C後半	不明	不明	不明	なし	頭蓋のみ
4号	不明	成人	～12C後半	土壙	不明	不明	なし	頭蓋片のみ、火葬骨
5号	不明	成人	12-13C	不明	不明	不明	なし	頭蓋片のみ
6号	男性	熟年	12C後半-13C前半	土壙墓	北西	仰臥屈肢	土師器杯1，鉄針1	

結果

1．1号人骨（女性・熟年）

木棺墓中に頭位を北に、顔面を右、つまり西に向けて、膝を曲げた右側臥屈肢の姿勢で検出された。上腕は共に肘で強屈して、手を顔面近くに置いている。副葬品として土師皿3枚が、頭蓋下から出土した。骨の脆弱化が顕著で、原型を保った状態での掘り出し、取り上げは困難で、計測値に基づく詳しい検討はできなかった。

主に頭蓋の眉間部や乳用突起部等の発達の弱さ、及び四肢の細さから判断して女性である可能性が強い。また、歯の咬耗がかなり進み脱落も多く、歯槽閉鎖が、進んでいること、一方、確認し得る部分の縫合の癒合は軽度であることなどから、熟年期の遺骨と推察される。

2．2号人骨（男性？・熟年？）

土壙墓に埋葬されていたもので、頭位をほぼ北に向け、仰臥で、両脚を開いて膝をほぼ90度に曲げている。頭部に瓦器碗と皿（各1）が副葬され、胸部からは鉄針が検出された。当人骨もまた、保存不良のため、計測値による検討はできなかった。

性判定の根拠にし得る部分が少なく、確定は困難だが、大腿骨などの骨体が比較的太いことから、一応、男性の可能性が考えられる。また、歯の咬耗がやや進行していることから、熟年期に達した個体と推察される。

3．3号人骨（男性？・熟年？）

掘り込みも不明な土層中から、頭蓋冠部だけが出土した。副葬品は無い。

乳用突起などの部分が欠落しているため、確定は困難だが、頭蓋冠が非常に厚く、男性の可能性が高い。また、縫合の癒合がかなり進行しており、熟年以上に達しているものと推察される。

4．4号人骨（不明・成人）

小さな土壙中に見いだされた。矢状、およびラムダ縫合を2辺に持つ右頭頂骨片のみで、火葬骨である。一般的に火葬骨は比較的遺存しやすく、当破片も骨質の保存状態は良好なので、もし通常の火葬ならば他の破片が腐朽しさることは考えがたい。

表面は灰白色の部分と黒色の炭化部分が混じり、ねじれやひび割れといった変形は認められず、比較的低温度で焼いたものと考えられる。

また、この頭蓋片の1辺は、かなりきれいな直線状の断面（ただし、外板のみで、内板は不整）を見せ、破損による不整な割れ口とは異なっている。僅か2センチ余りの部分しか残っていないので、創傷との断定も困難だが、今後の出土例での注意事項として指摘しておきたい。

5．5号人骨（不明・成人）

これも土中から右頭頂骨1片のみ出土したものである。

骨質の保存状態は良好であり、これも4号同様、ここに埋葬された遺体の一部が残ったものとは考え難い。

6．6号人骨（男性・熟年）

土壙墓中より、頭位を北西にとり、顔を右に向けた仰臥状態で出土した。上肢は肘を軽く曲げてやや開き気味に体側に置き、下肢は曲げた膝を左に倒している。頭部右に土師器杯1が副葬されていた。

頭蓋は一応原型を保った状態で出土したが、脆弱化が著しく、変形、歪み等によって、計測値による詳しい検討はやはりできなかった。

ただ、出土時の観察によって、この時代の者としてはかなりの高顔傾向と、強度の歯槽性突顎が確認された。

また出土時の寛骨などの観察所見から男性であり、歯の咬耗や縫合癒着の程度から、熟年人骨と推察される。

一部下肢骨の計測値が得られたので、その結果を比較群と共に表2に示す。

大腿骨の骨体矢状径、及び横径は吉母浜中世人（中橋・永井、1985）などと大差無いが、その断

表2　下肢骨計測値（男性）

	博多78 (中世)		吉母[1] (中世)		材木座[2] (中世)		天福寺 (近世)		江戸[3] (近世)		九州[4] (現代)	
	r.	l.	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨												
1 最大長	397	402	18	419.1	11	419.9	20	415.2	—	413.8	59	406.5
6 中央矢状径	27	—	19	28.1	69	27.2	17	27.7	—	28.3	59	26.5
7 中央横径	28	—	19	27.7	69	26.8	17	26.9	—	27.4	59	25.6
6/7 中央断面示数	96.4	—	19	101.3	69	102.5	17	104.1	—	103.9	58	103.8
脛骨												
1a 最大長	325	320	11	348.0	—	—	16	340.1	—	331.2	60	326.9

1）中橋・永井（1985）　2）鈴木（1956）　3）遠藤、他（1967）　4）阿部（1955）、鎗鍋（1955）

表3　推定身長の比較　(cm)

	男性	
	N	M
博多78次（中）	1	156.4
吉母浜（中）	18	159.7
材木座（中）	10	159.7
席田青木（近）[1]	30	160.3
上月隈（近）[2]	8	158.9
天福寺（近）	24	159.4
江　戸（近）	95	159.1
金　隈（弥）[3]	17	162.7
西南日本（現）	37	157.7

1）中橋（1991）、2）中橋（1993）、3）中橋、他（1985）

面示数に見るように、粗線の発達は弱い。

大腿骨、脛骨共に長さがかなり短い。大腿骨最大長からピアソンの推定式で求めた推定身長は、156.4cm（表３）となり、中世人としてもかなり短躯の男性である。

総括・考察

1992年度の博多における発掘調査によって、計６体分の中世人骨が、土師皿や碗などの副葬品と共に出土した。12－13世紀の、ほぼ鎌倉時代のものであるが、残念ながら骨の保存状態が全体的に不良で、詳しい特徴は掴めなかった。ただ、１体の男性（６号）では、かなりの高顔傾向と歯槽性突顎が認められ、やや低身長でもあった。

博多出土の中世人では、これまでも他地域の中世人の一般的特徴とは少し異なり、幾分高顔傾向のある可能性が指摘されている（中橋、1989）。計測値は得られなかったが、今回の出土例もそうした傾向を追認させるものであり、歯槽性突顎という中、近世人的な特徴と共にここに注記しておきたい。

また、埋葬姿勢において、確認された限りにおいて、一応、頭を北に向ける傾向が認められるものの、姿勢は三者三様で統一されていないことも、これまで博多から出土した中、近世人の埋葬状況と共通する点である。他地域では近年、北頭位、右側臥屈肢に統一された埋葬事例が報告されており、それらとは異なる博多の埋葬状況として、今後とも注目していきたい。

謝辞

当人骨を研究する機会を与えていただき、種々ご教示頂いた福岡市教育委員会の皆様に深謝致します。

文　献

阿部英世(1955)：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究２。

遠藤萬里、北条輝幸、木村賛(1967)：「四肢骨」増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体（鈴木、他、編）、東京大学出版界。

鑄鍋命達(1955)：「九州人下腿骨の研究」、人類学研究２。

Martin-Saller(1957)：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

中橋孝博(1987)：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌95。

中橋孝博(1988)：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）」、六典出版。

中橋孝博(1989)：「博多遺跡群第26次調査・築港線関係第３次調査出土の中世人骨について」、福岡市埋蔵文化財調査報告書204。

中橋孝博(1991)：「福岡市上月隈遺跡出土人骨（近世・弥生）」、福岡市埋蔵文化財調査報告書257。

中橋孝博(1993)：「福岡市席田青木遺跡出土の弥生、近世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書356。

中橋孝博・永井昌文(1985)：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。

中橋孝博・上肥直美・永井昌文(1985)：「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」史跡金隈遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書123。

鈴木尚(1956)：「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」、岩波書店、東京。

博 多 44

—博多遺跡群第78次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第393集

1995年3月31日発行

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　秀巧社印刷株式会社

福岡市南区向野2丁目13-29